
頑張れ時空管理局 ～ × 遊戯王編

黒影翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れ時空管理局×遊戯王編

【Nコード】

N7140T

【作者名】

黒影翼

【あらすじ】

とある管理外世界でロストログアの使用が感知され、幾人もの心身喪失者が発生する。対処の為集まったなのはとフェイトは…

注）シリアス成分の無いギャグ小説となっております。前書きに注意した上で許容できない方は戻られる事をお薦めします。

（前書き）

注！！

勢いで書いたギャグ小説となっている為、以下が嫌いな方はご注意ください。

- ・原作内では無い性格変動が発生する。
- ・タイトルの割に遊戯勢の出番が少ない&扱いが惨い。
- ・そもそもデュエルしてない。
- ・流れ等におかしな場面が見受けられる。

上記に理解がある方は…良ければ見てやってください。

JS事件を解決した機動六課。事件後それは別の形で残る事になる。

その驚異的な程優秀な手並みと、大きな問題が発生した際の対処にエースが分散していると対処しきれないと言う問題点に対し、難度、重要度、危険度が高い事件の際に召集される特別部隊として、機動六課の枠組みを残す事になったのだ。

連携をとる必要性もあって、定期的に集合訓練を行う事も許可されたため、フォワード陣も隊長陣も偶の再会を堪能する場となっている。

これは、そんな特殊部隊、機動六課の事件の一端を描いた物語である。

「私のターン！ドロー！！」

真昼間の時空管理局の一室を使って、高らかに宣言しつつ腕の機械からカードを引き抜く、管理局でもエースオブエースと名高い高町なのは教導官。

同じ機械を腕に相対するのは彼女の親友にして執務官たるフェイト
「T」ハラウオン執務官。

「う…」

「くっ…」

二人の間に緊迫した空気が流れ…

「うっうううう…」

流れ…

「にゃあああああつ！！！！！！」
「な、なのは！おちついて！！」

なかった。

って言うかこれ以上ないくらいにぶっ壊れた教導官の姿があった。

「はあ…はあ…ご、ごめんフェイトちゃん…こんな事してる場合じゃないんだよね…」

暴走から立ち直ったのはは、傍らで苦笑するフェイトに謝りつつ手にした飲み物を飲み下した。

そもそも魔導師の二人が何故こんな『遊び』に興じているのかと言うと…

管理外世界でロストロギアの反応を感知した局員が調査に出向いたが、何故か完全に無反応の抜け殻と化して発見された。

何事かと調査に幾人かを割り当て、調査の度に増えていく抜け殻。

その様相はさまざまで、何かに怯え続ける者もいれば、我欲丸出しの内容をにたにたとしながら呟きつつける者も居た。

が…その全てが、未だにまともな意識を取り戻していない。

強力な精神操作の跡が見られ、まるで『呪い』のようであると言う診断結果だけが残っていた。

そんな中、直接ロストロギアに近づく事無く情報収集を行った優秀な局員が、ある程度の情報を無事持ち帰る。

ロストロギアは、形状はともかく必ず『金色で禍々しい一つ目が描かれている』という事。

該当の管理外世界では、とあるカードゲームが大流行している事。

ロストロギアを持つものが、そのカードゲームを行っている事。

そのロストロギア自体を除き、特別な力を持つようには見えないという事。

ロストロギアは、ゲームでルールを破ったものの、実力行使を行おうとしたものに強制的に効果を発揮すると言う事。

リアルタイムで局と通信を行いながら調査すると言う手法をとってこれだけの情報を掻き集めた局員も、今は抜け殻の一つと化していた。

「…そうだよね…ティアナの頑張りは無駄には出来…」

なのは思い出すようにそこまで呟いて、目頭を押さえる。

なのはの様子を示すとおり、抜け殻と化したのはなのは最高の教子である四人のストライカーの一人、ティアナⅡランスター。

なのはは、抜け殻となったティアナの様子を思い出して、涙を流す。

「はああああ…ティアナそんなに恐かったのかなあ………」

「な、なのはあ…」

理由が滅茶苦茶ずれていた。

ティアナは『トラウマを蘇らせられる』ケースだったのか、現在病院で『なのはさんごめんなさい…』と延々と呟き続け、桜色の光が視界に入るたびに禁断症状を引き起こすと言う状態になっていた。なのはは見ないほうがいいとめられつつも教え子を心配して病院に駆けつけ、状態を知って灰と化した。

何とか皆を元に戻そうと気合を入れなおしたなのはだったが、それでもティアナを思い出すと落ち込むのである。

認めてくれていると思っていた（実際ティアナにもう反感はない）教え子のトラウマになっていたダメージは大きかった。

だが、傍らで励ますフェイトも…

「（ま、まあなのはの魔砲は正直私もトラウマだし…死ぬほどのダメージを死ねずに受け続けるって酷だよね…）」

と、自身が受けた最終戦争よろしくな極太砲撃を思い出すとティアナの気持ちが分かるため、下手な事を口走れず半端な励ましで終わっている。

ボロボロに落ち込んでいるのはに対して悲しげな表情を向けるフ
ェイト。

「そんなに嫌なら…放っておく？」

「それは…ないよ。」

管理外世界の出来事であるため、いつそ諦め放置するという方針も
管理局にはあった。

フェイトがそこを持ち出すと、なのはは心を奮い立たせて復活する
と言うのが現状だった。

「だよね。このまま終わらせるにはあまりにも被害が多すぎる…」

「そもそもティアナを放っておくつもりも無いし、いくら次元世界
単位での影響が無いにしてもロストログアを平気で使って心を奪っ
ているような人達を放っておけないよ。」

二人は言い合い、頷きあう。

多数出ている犠牲者の為、罪を重ねる者を止めるという信念の為、
何より文字通り魂をかけて情報を集めてきた教え子の為…

二人は再び向かい合う。

ロストロギアは、ゲームでルールを破ったもの、実力行使を行おうとしたものに強制的に効果を発揮するという事もあって、管理外世界のカードゲームを修得しなければ…極めなければならない。

二人が本気で『遊び』であるカードゲームに全力を注いでいるのは、こんな理由であつた。

人選として二人が選ばれたのは、カードゲームが扱えるのが必須である為シグナム等がどうしたって対応できない事と、チームマツチが存在するため、息が合う必要があると言つ理由からである。

だが…そこから先は困難を極めた。

まず、カードが必要になるのだが、これが局の予算で降りなかった。理由は、ティアナの調査結果だけで予算を出させる事ができなかったから。

だがカードは買わなければならず、『特に貯金の使い道もないし教え子含めて命がかかっているから』となのはとフェイトの二人は自腹を切ることにした。

しかし、此処で問題が一つ…

ぶっちゃけ二人揃ってカードゲームを舐めていた。具体的に言えば

その費用を。

某社長はカード三枚揃える為だけに一人自殺にまで追い込むほどの手回しをしたのだ、早々簡単に買いきれるものでもない。

無論、いいカードがあれば勝てると言うものでもないが、恐らくゲームマスター的な能力だろうと予測していて、ろくなカードも集まらないままそんな連中と戦える筈がないと二人は妥協せずカード集めに資産を費やし、管理外世界から購入という事もあつて余計な手続きが必要な分原価より高くつき、二人は貯蓄のほぼ全額を費やす事となった。

次に、ルールを理解し仕合…デュエルを行えるだけの段階へ持つていく必要があつたのだが…

此处でまた困難を極めた。

何しろルールが複数あるのだ。その上、現在の最新ルールが分かつた所でロストログアを使用している者がいつのルールで勝負を挑んでくるか分からない。

その為、何も分からないところから複数のルールを把握する必要があつた。

更に次に練習。

二人だけで延々とやって実戦は始めて…ではシャレにもならない。

これ幸いと現地で一般にもはやっている事を利用して現地で実際に情報収集かねてやってみることにしたのだが…

カードゲームの練習に行かせてください…等と言える訳がなかった。

…二人は有給で行った。これも使う事はないだろうから別に良かった。

だが、現地でも大流行してプロも居るとはいえあくまで『遊び』である。

貴重な時間を無駄にすまいと必死で現地人とデュエルを行うのは達だったが…

『あの二人またやってるぜ…』

『いい歳した大人が…働いてないのかな？』

『亭主元気で留守がいいって奴だろ。お気楽だよなあ…』

ひそひそと囁かれながら後ろ指差されながら子供に混じってのデュエルは精神的に困難を極めた。
今頃他の局員は事件解決にあたったり訓練しているんだろうなあなんて一瞬でも考えれば精神的に耐えられるものではなかった。

そして…ついに運命の日を向かえる。

小規模な大会で優勝できる程にはなった二人は今日、とうとう事件の捜査に乗り出す事にした。

「やっと…だね。」
「うん…」

長かった。本当に長かった。
幼少から遊びそっちのけで朝から晩まで魔法の練習でも構わないく

らしいのはが、本来の勤務時間に魔法そっちのけで遊びを極める必要があったのだ。

フェイトはフェイトでなのは相手とは言え数日単位でぶっ壊れるのをなだめつつ、やっぱり本来の仕事より遊びをやっている状況は苦としか言いようが無い。

二人とも、今回ほどストレスが溜まった事は未だかつて無い。

だがまだ終わりじゃない。

ここで自分達が精神崩壊を起こせば、下手をすると人員をこれ以上失わない為に今回の件について打ち切りになる可能性すらある。

何が何でも勝たねばならなかった。

バリアジャケットにデュエルディスク、手にはデバイスという、コスパレカードゲーマー的な格好で上空からワイドエリアサーチを行うのは。

フェイトも同様にサーチ魔法を飛ばし、二人は送られてくる映像を眺める。

そこで二人が見たものは……

「ドロー！モンスターカード！！ドロー！モンスターカード！！ド
ロー！モンスターカード！！ドロー！ドロー！ドロー！ドロー！
ドロー！ドロー！……」

「ぎゃあ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああつ つつ！ ！！！！！」

カードの中身すら確認せずに引いては捨て引いては捨てを繰り返し、
相対する少年をいたぶり続ける鎖をかけた少年と……

「A B 左左 A 右右 B A 左右左右 B A B A B B B B ! ! ! ! ! !」

「B A上下左A左右上A B A右右B A上下A左！！！！！」

コントローラーを具現化させ、ひたすらにコマンドを叫び続ける二人の少年の姿だった。

しかも、鎖をかけた少年の方はロストロギアとされる金色の一つ目が描かれたアクセサリーを鎖に繋げていた。

完全にルール無用のゲームマスター。

普段優しいフェイトも、これまでの苦勞も含めさすがに怒りを覚えた所で…

ナニカが……切れる音がした。

不吉な……あまりにも不吉な音だった。

溢れんばかりの冷や汗を流しているにも拘らず、それに気づく事すらできない程緊張したフェイトは、カタカタと頭を震わせながら首を隣に……幼馴染で親友である筈の女性がいる方向に傾け……

「うあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああつつつつつ！！！！！！！！！！」

空が裂けるのではないかと思われる咆哮と共に、突如巻き起こる風圧に軽く飛ばされた。

態勢を立て直したフェイトは、すぐに異常に気づく。

……なのはから感じられる魔力値が、とんでもなく上昇していた。

怒りでパワーアップって何処の戦闘民族！？何て突っ込みが、人によつては入れられるのかもしれないが…
フェイトには無理だった。あらゆる意味で。

自分のデュエルディスクを破壊する勢いで腕からもぎ取ったなのは、それをフェイトになげ渡す。

「フェイトちゃん。」

「は、はい…」

声は、若干低い位で普通だった。
俯いていて表情の見えないなのはに敬語で答えるフェイト。

なのはは、そんなフェイトを首だけ動かして見る。

「今回の件…私に任せてもらってもいいかな？」

「は、はい…」

声は、あくまでも普通だった。

だが…フェイトは自分を見たなのはの目を見て悟った。

これは…無理だ…と。

なのはの瞳は、ティアナのトラウマと化した時のように凍っていた。垂直に、ゆっくりと降りていくという、何処かボスっぽい降り方をしているのはを、フェイトはただ震えて見送るしかなかった。

現地に下りたなのはは、未だカードを抜き続けるアクセサリーをかけた少年をバインドで拘束する。

「な、何!？」

拘束された少年…遊戯は、無理強いをしようとするなのはを睨みつけ…

「罰ゲーム!!」

と、叫んだ。

アクセサリー…千年パズルの瞳が光り…

何も、起きなかった。

ああ…何だ。

ジュエルシードを単騎で封印しきる魔力があれば耐えられる程度のものだったんだ。と、なのはは冷めた頭で思う。

「……おかしいな…どうしちゃったのかな…」
「放せ！…！」

いきなり訳が分からない力で拘束されたにしては冷静な遊戯。だが、目の前の女性を…なのはを舐めすぎていた。

なのはは、人差し指を遊戯に向け、光を放つ。
遊戯の頬を掠めた光は、その遙か先で閃光となって弾けた。

自身の背中から来る溢れんばかりの桜色の光を目にした遊戯は、それでようやく黙り込む。

「勝ちたいのは分かるけど…ゲームにはルールがあるんだよ？それを無視してやりたい放題じゃ…ゲームの意味…無いじゃない…」
「あ…あ…」

何処で見ていたのか、何故それだけでこれほどまでに怒っているのか、遊戯にはまったく理解できなかったが…

現状が、今まで経験したどんな状況よりもやばいものだと、このとき初めて悟った。

「私の言ってる事…そんなに間違ってる？」
「や、止める…」

レイジングハートを振り上げるのは。
何故が増した魔力に上乗せでブラスター3でのスターライトブレイカー。正直これ以上ない程のオーバークル。

「少し…頭冷やそうか。」
「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
あああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

無慈悲に放たれた砲撃は、一步も動く事ができない少年を撃ち抜いた。

…その後は、あっという間だった。

子兎のように震える遊戯は、すぐさま知合いの情報を売り渡した。なのは千年アイテムを持つ者を、片っ端から問答無用でスターライトブレイカーで撃ち抜いた。

ひっ捕らえては見覚えのある局員の心を元に戻させると言う作業工程を繰り返し、全てが終わるまでに一日とかからなかった。

解決のあまりの速さに局での名がいつそう高まる事となったのだが…

真相を知るフェイトは、今回の件に関する全ての記憶を、親友への恐怖と共に闇の中に葬った。

ルールとマナーを守って楽しくデュエルしよう!!

(完)

(後書き)

速人「えー、作者代理人の速人です、よろしく！」

出演者他多数「……………」

速人「っておいおい恐いな皆して。まあいいや。とりあえず疑問に答えてくから。まずキャラから。」

キャラ「今回のクロス…ネタ的には私が出るべきじゃなかったんですか？」

速人「えーと…『思いついた時に出てこなかった。悪いね。』だそうだよ。」

キャラ「ガンツー!!?」

なのは「だそうだよって？」

速人「いくつかはカンペで回答貰ってるから。はい次、えーとKCの社長さん？」

海馬「俺の出番が凡骨とのコマンド入力のみとはどういうことだ!? 納得できん!!」

速人「ご愁傷様です。はい次。」

海馬「ふざけ」

速人「はい次! えーと…現金自動預け払い機？」

闇遊戯「違う!! それに俺がルール無用のデュエルなんか」

速人「前書き見て来い。はい次魔王。」

なのは「…ネタだもんね、わかってるの。何で今回こんな形式であとがきやってるの？」

速人「あ、それは書いてあるな。えーと…『実はやってみたかったので今回試験的にやってみることにした。』そうだよ。」

なのは「なるほどね。」

速人「あれ? まだ続きが…『出番無かった人とか扱い酷かった人がいるので、ストレス解消になればと思っていけにえを送りました。作者だと思って鬱憤をはら』っておい…コレ…」

なのは勢多数のデバイス起動及び遊戯王勢多数のデュエルディスク
起動。

速人「ちょ…じょ、冗談だろおい！こらふざけんな！！止めろ！俺
は関係！」

放送コードに引かかる為ここで終了します。

読んでくださった寛容な皆様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7140t/>

頑張り時空管理局 ~ × 遊戯王編

2011年10月6日20時26分発行